

秀逸なものが有り、借借姿の中會根・宣次、金光三氏が「定数は正」のお題目を唱えながら、本心はやる気がないという図など辛辣だった。同じ朝日新聞の「素粒子」欄の、「虫下しやボルノの宣伝ではあるまいに。六・六法案出すだけを強調する首相、宮沢氏の怪」の無理なとげとげしさより上等である。

新聞という媒体を最も効果的に活用し、短文ながら日本の文字文化の伝統を守るのに貢献しているのは、朝日新聞朝刊連載の大岡信氏の「折々のうた」と、日本経済新聞日曜掲載の北村太郎氏の「うたの言葉」であろう。今日の新聞紙面に反映される卑小にして粗雑な風潮に心屈する者が、例えば吉野秀雄の亡妻悲歌の鮮烈さを教えられ、雨のあけぼのの六字の美しさを説かれる時、たちまち心は豊かになり、ゴミのごとき情報は不用となる。

★ベトナム報道と中国報道

中嶋嶺雄
東大教授

わが国マスコミの中国報道、とくに毛沢東時代の中国にかんする報道が、文革初期の壁新聞ルポを除いて、著しく真実性に欠け、中国についての虚像の増幅にしか貢献しなかったことは、もはや周知の事柄である。こうした中国報道についての不信感が根を張ってい

るためか、今日でもマスコミの中国報道への信頼性は、決して高くはないようだ。先日もある講演会で、私の話への質問の際に、マスコミ、とくに「朝日新聞」の中国報道を糾弾する意見を耳にしたけれど、その批判は「朝日新聞」の中国報道は今日でも全くの虚報だという強い先入観によるものであった。

この事実を知って私は、ひとたび形成された不信感をぬぐうのは容易ではないな、と思う半面、これでは「朝日新聞」も立つ瀬がないと感じたので、同紙の中国報道は、特派員が東亜同文書院や東京外語大卒の心情的「中国通」の世代から変わったこともあって、以前とは本質的に異なっていることを述べ、その具体例として、「内部——ある中国報告」(朝日新聞社、一九八三年)の著者であり、中国社会の内面を深く抉りつづけた船橋洋一記者のような国際的スケールの北京特派員が八〇年代初期に現われたこと、現在の「朝日新聞」北京支局の記者諸氏もかなり醒めた眼で中国を見ていることなどを指摘したのである。現に北京勤務二度目の経験がこのところかなり生きてきたと感じられる近藤竜夫特派員は、五月二十二日付「視角」欄で日中防衛交流の背景を淡々と紹介して日本側の節度ある対応を求めているが、三月四日付の同欄で

は「開放政策と『向錢看』と題し、私欲に走る最近の風潮を掘り下げて批判的に伝えている。この間、中国の小さな動きを丹念にフォローしている新鋭の加藤千洋特派員は、五月十八日付の「不正事件の海南島幹部 一斉に自己批判」という記事で、話題を呼んだこの事件の結末をきちんと追跡している。こうして見てくると、新聞批判といっても、ただア・フリオリに「朝日新聞」を非難、糾弾するだけではもはや意味をなさないことが明らかになってくる。

そこで次に「朝日新聞」の最近のベトナム報道に目を転じてみよう。いうまでもなく、わが国のマスコミは、中国報道ばかりか、ベトナム報道にかんしても大きなミス・リーディングをおこなってきた。ベトナム戦争は、国際的内戦であったばかりか、ベトナム労働党(現共産党)を中核とする長期の革命戦争であり、サイゴン陥落は、「北」の社会主義が主導する「南」の革命、つまり南北二段階革命の第二段の出発点であったのに、マスコミはおしなべてベトナム戦争をもっぱら民族解放闘争だと見做し、サイゴン陥落は、そのような解放のゴールだと報じてきたのである。このような認識では、あの膨大な量の難民(ボート・ピープル)が輩出した理由をと

